

機会と選択を 繰り返して 創られるキャリア

将来の目標から逆算した進路指導だけでは難しくなっています。

そうしたなか、「自分が起こした意図的な機会」だけではなく、

「外部要因で起きた偶発的な機会」も能動的に捉え、

選択・行動することの繰り返しが高校生の視野を広げ、キャリア観を形成していくのではないか。

そうした仮説を、解説編と対談編を通じて探ってみました。

取材・文／堀水潤一 撮影／平山 諭

Part 1

偶発的な機会や小さな一歩から 広がる新しい世界

解説

Explanation

「やりたいこと」の有無にかかわらず、高校時代の豊かな機会や体験は、若者のキャリア観に大きく影響します。次世代社会のキャリア形成に詳しい研究者の古屋星斗さんに解説して頂きました。



リクルートワークス研究所 主任研究員 古屋星斗さん

ふるや・しょうと●一橋大学大学院社会学研究科修了後、経済産業省入省。産業人材政策、投資ファンド創設、福島の復興・避難者の生活支援、政府成長戦略策定に携わる。2017年より現職。専門は労働市場分析、未来予測、若手育成、キャリア形成研究。一般社団法人スクール・トゥ・ワーク代表理事。近著に「会社はあなたを育ててくれない」(大和書房)。

体験や機会があつてこそ
生じる学びたいという動機

ベストセラー『LIFE SHIFT』で“人生10
0年時代”を提唱した組織論学者のリンダ・グ

ラットンは、「教育→仕事→引退」という3ステージの人生の崩壊と、それに代わるマルチステージの人生を提起しました。確かに今、人生における選択の回数は飛躍的に増え、それらが訪れる時期も早まっています。転職、



副業、起業、育休、介護離職などの選択の機会が次々と現れる結果、高校卒業時の進路選択は、人生を左右する最大の機会とは言えなくなりました。数ある選択の最初の一つに過ぎなくなっているわけです。

だからといって、その最初の実験の重要性が下がったわけではありません。ただし、その意味は大きく変化しつつあります。「自分は何をしたいのか」を考え抜いて選んだ経験が次のステージでの満足度につながり、その次の選択でも生きてくることがわかっています。例えば、「21世紀出生児縦断調査」(文部科学省・厚生労働省)によると、大学などの進学先を、「将来就きたい仕事と関連しているから」という理由で選んだ人は、大学生活の満足率が50%である一方、「合格できそうだったから」という理由で学校選択を行った人は満足率が25%です。

では、学びたいとか、こういう仕事に就きたいといった動機はどのように生まれるのでしょうか。動機は、もてと言われてもてるものではありません。真の動機は体験から生まれるのです。先の調査からは、職場体験や職場見学が学習動機を増進させることもわかっています。考えるまでもなく、例えばJAXAで宇宙飛行士の話を聞き宇宙関係の職に就きたいと思えば物理学を学びますし、JICAで海外協力隊の話を聞き国際貢献したいと思ったら英語を勉強しますよね。体験があって学びがある。ところが日本の学校では、この

順番が逆になっているケースが多いように感じます。教育実習もそうですが、座学で理論を学んだ後に実習がある。体験があって初めて、学ぶ必要性を実感するのに、そのときには時間が足りません。社会人になってから「あれを学んでおけば…」と後悔してはもったいない。

こんな調査結果もあります。「大手企業新入社会人の就労状況定量調査」(リクルートワークス研究所)によれば、入社前の社会的経験(「複数の企業・職場の見学」「中高時代に複数の社会人から仕事の話聞く経験」「長期のインターンシップ」「知人ではない多人数の前でのプレゼン・スピーチ」など)の多寡が、若手社員の職場に対する評価やキャリア意識(満足感やいきいき感)と相関しているということがわかっています。

こうした調査を総合すると、若いときの社会的経験が、こんなことを学びたい、こんな仕事に就きたいという動機につながり、それが進学・就職先での満足度やその後のキャリア形成に影響を与えていることがわかります。

本人の合理性を超えた機会の提供によって視野が開かれる

とはいえ、現実には将来の目標や就きたい仕事を見つけている高校生は決して多くはない。やりたいことがあるというのは、恵まれていることでもあるのです。ただ、その恵まれた高校生にも落とし穴があります。それは「現



在地と目標との間にあると本人が認識している機会しか、本人が機会として認識できない」ということです。若者に限らず、誰も目標が明確であればあるほど、その途上にない機会は、無駄なものとして切り捨ててしまいがち。目標があるのなら、最短距離を行きたくなるものだからです。

しかしながら、「計画的偶発性理論」を提唱したスタンフォード大学のクランボルツ教授や、「キャリア・ドリフト」という概念を提唱した神戸大学の金井壽宏名誉教授らが指摘する通り(次ページ参照)、キャリア形成において偶発的な出来事の影響力は計り知れません。多くの大人はこれまでの人生を振り返っ

たとき、偶然の積み重ねの上にキャリアが築かれてきたことを肌感覚で知っているでしょう。

だからこそ、やりたいことが明確な生徒に対しては、新しいトビラを開けるチャンスを見落とさないよう、時おり、本人の視界の外にある機会に目が向くようフォローすることが大切です。

もちろん、早くに目標を決めるにこしたことはありません。最大の理由は、新たな目標が見つかったとき再挑戦しやすいからです。私の好きな言葉に、「目的地のない船に追い風は吹かない」というものがあります。目指す方向が決まって初めて、今吹いている風が追い風なのか向かい風なのか判別できるし、今置かれている環境が良いか悪いかも判断

Worksheet

あなたはこれまで、どんな「機会と選択」がありましたか？

To the future

外部要因で起きた偶発的な機会

学生時代のあなた

自分が起こした意図的な機会

さまざまな機会の積み重ねによって、ありたい姿や就きたい職業が見えてきたとしても、それはあくまで「仮決め」のようなもの。人生100年という響きから長距離マラソンを走り続けるイメージがあるかもしれませんが、選択の回数が増えるこれからの社会は短距離走の連続。ひと呼吸おいた後、次の未来が広がっていきます。

多くの人は「さまざまな機会によって自分のキャリアは創られてきた」と振り返ります。機会には、自ら起こした意図的なものもあれば、「人に恵まれた」「たまたまチャンスが転がってきた」など、外部要因で生じた偶発的な機会も少なくありません。そうした機会をどう捉えるかが主体的なキャリア形成の鍵となります。



できます。

ただし、その目的地はあくまで「仮決め」のようなもの。次のステージで何が起るかは、その時点ではわかりません。大手企業で活躍していた方が退職後に始めた、まったく異なる仕事を「これこそ天職」と感じたという話もあります。変化の激しい現代社会においては、いつになっても「本決め」する必要すらないのかもしれませんが。

大学から社会までつながる 探究での学びの近況とは

では、「やりたいことがない」多数の高校生には、どのようなアプローチが有効でしょうか。キャリア観を変えるような社会的経験や機会に意図的に出会うには、それなりの労力がかかります。企業の人に連絡をとったり、地域の大人と話したりといったアクションは高校生にとってハードルが高いでしょう。けれど、そうした耳目を引く行動だけにキャリア観を変える力があるわけではありません。その前の助走のような行動にも少なくない力があることがわかっています。例えば、●挑戦したいことを友人に話してみる。●話したことのない人とコミュニケーションをとる(小さな他流試合)。●友人に誘われたイベントに行ってみる。●がんばっている友人を応援する(応援しているうちに疑似体験したり、焦りが生じたり)など。

しかし、こうしたスモールステップの重要性を提唱し、奨励し始めると今度は、若い人か

ら「スモールステップはどう起こせばいいですか?」と質問されるようになりました。私としては、必要性さえ感じれば誰でも実行に移せる小さな行動と考えていたため、こうした問いは想定外でした。

反省を込めて、検証し直すなか、浮上してきたのが、「言い訳」の有無でした。例えば、「先生に言われて仕方なく」「親に言われてシブシブ」「友達にむりやり」といった言い訳があることで、人は行動しやすくなります。キャリアに関する何らかのイベントに参加する際、向上心がある様子を周囲に見られることを気恥ずかしく感じる年頃の高校生も、「先生に言われて仕方なく」という顔をしていれば気が楽です。変化が起こる瞬間に注目した場合、動機は体験から生まれており、その体験に接触する際のきっかけは自発的なものに限らなかったのです。若手向けの勉強会後のアンケートで、「本当は来る気はなかったのですが、上司の指示で参加したところ、大変刺激を受けました。例えば…」という長文の感想を頂くことがあります。

思うに、そうした機会でも最も得をしているのは、なにかしらの言い訳があって参加した人だと思います。自らの意思で参加した人は、いずれ別の場所で似た知見を得ることはできそうですが、そうでない人は、一生出会うことがなかったかもしれない知見を得た可能性が高いからです。

総合的な探究の時間も、ある意味、言い



キャリア理論解説

計画的偶発性理論

スタンフォード大学のクランボルツ教授が1990年代に提唱したキャリア理論。個人のキャリアの重要なチャンスの80%は予期せぬ出来事によって起こるとし、そうした偶発的な出来事が到来した際に機会を逃さないための力、行動特性として「好奇心」「持続性」「柔軟性」「楽観性」「冒険心」の5つを提示。また「未決定」の状態を単なる優柔不断ではなく肯定的に捉え、学習をもたらすための望ましいものの一つとした。

キャリア・ドリフト

金井壽宏(神戸大学名誉教授)が提起した概念。ドリフトとは漂流のことで、流れの勢いに乗るというニュアンスも。自分のキャリアについて大きな方向づけ(キャリア・デザイン)さえできていれば、節目と節目の間は偶然の出会いや予期せぬ出来事をチャンスとして柔軟に受け止めるために、あえて状況に流されるままであること(キャリア・ドリフト)も必要と指摘。

越境学習論

日本で2010年代以降注目されている理論。代表的な研究者である石山恒貴(法政大学大学院政策創造研究科教授)によれば、自らが「準拠している状況」と「その他の状況」を分ける境界を往還し、そこから学びを得ること。いわゆるホームとアウェイを往復することで、ホームだけでは得られない経験や知見を得て、ホームで得たものに組み合わせていく。

訳から始まる時間と言えるかもしれません。解決したい課題のあるなしに関係なく全員が受ける必要があり、けれど取り組むうちに、のめり込んでいく生徒がいるのはご承知の通りです。総合型選抜への準備も似たところがあります。高校生からよく「職業について調べているので話を聞かせてください」というインタビュー依頼があります。聞けば、レポートにまとめポートフォリオの一つとして大学に提出する材料にしたいとのこと。また、ボランティア団体の代表からは「最近、高校生がたくさん来る」と聞きました。どうも自己PR書類のための

ボランティア証明書が欲しいらしいのです。

こうした行為を、大学合格を目的とした打算的なものと切り捨てることは簡単です。けれど、やりたいことを見つけたくても、きっかけがなく、将来に対してモヤモヤしている生徒にとっては実は大きな一歩を提供している。ボランティア団体の代表もこう続けていました。「ですがその後、ボランティアを熱心に続けてくれる子が何人も残るんです」と。言い訳をきっかけに何らかの機会に触れることで開かれる新しい世界もあるのです。

(次ページからの対談もご覧ください)

Part 2

学校現場にあふれる 生徒の未来を切り拓く機会

対 談

Dialogue

引き続き古屋星斗さんに登場いただき、埼玉県教育局の上田祥子さんを交え、機会が果たす役割について語り合っていました。

——上田さんは、さまざまな機会と選択を経て（次ページ参照）、埼玉県教育局で産業教育・キャリア教育担当の指導主事をされています。加えて、全国の高校・少年院・児童養護施設などでキャリア教育を行う社団法人の理事

もされています。古屋さんとは、その団体を通じての知り合いだとか。

上田 古屋さんが代表を務める別の団体と2019年にイベントを実施して以来のお付き合いです。古屋さんは気鋭の研究者でありな

うえだ・さちこ ●東京学芸大学中学校教員養成課程国語科卒業後、不動産ディベロッパーを経て専業主婦に。出産を機に教育の重要性を改めて痛感し、2011年度より埼玉県立高校国語科教師。JICA教師海外研修参加経験も活かしSDGsを取り入れた授業実践が話題に。2020年度川越初雁高校に赴任。同年一般社団法人ハッシュダイソール理事就任。2023年度より現職。三女の母。

上田祥子さん

埼玉県教育局 県立学校部 高校教育指導課
産業教育・キャリア教育担当指導主事

古屋星斗さん

リクルートワークス研究所
主任研究員



がら、高卒就職・非大卒人材という見過ごされがちなところに光を当ててくださる稀有な人。若年者へのキャリア教育の推進を応援してくれています。

古屋 上田さんは生徒を第一に考える先生ですが、だからこそ教室にとどまらず、外部の力をどう借りるか、行政の仕組みをどう活用するかなど広い視野から行動している人です。大きなことを言わせてもらうなら、すべての人が輝ける社会を創ろうと考えている同志だと思っています。

——立場は違っても、同じ方向を見ている

人って惹かれあいますよね。

古屋 確かに上田さんのネットワークと私のそれが重なることは少なくありません。ただ、知り合いの知り合いが自分の知り合いだったとき、よく「世界は狭いね」と口にしますが、そんなとき「それって勘違いかも。単に自分の世界が狭いだけでは？」と自問するようにしています。知らない世界はたくさんあるのに、そこと接する機会がないだけかもしれませんから。

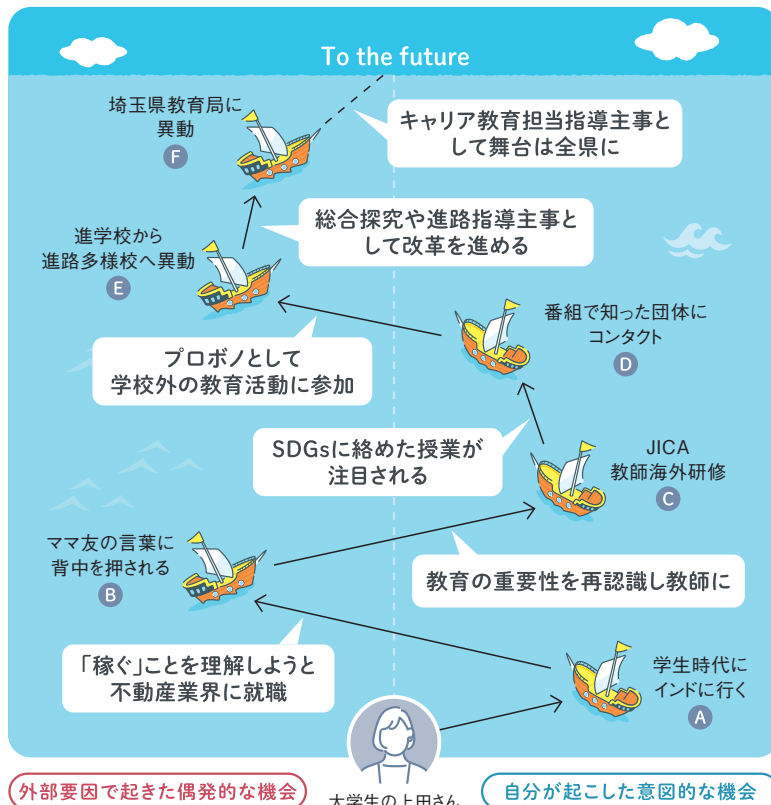
上田 確かに類は友を呼びますが、閉じた関係だけに終始するとエコーチェンバー

上田さんの機会と選択

A 教員一家に育ち教職を目指すも大学時代に訪れたインドで人々のパワーに圧倒され人生経験不足を痛感。「このままでは説得力のある教師になれない」と思い、まずはお金を稼ぐことを理解しようと不動産関係の企業に就職。

B 結婚を機に退職。専業主婦として子育てするなか改めて教育の重要性を実感。ある日ママ友から言われた「教師って尊い仕事だと思う」という言葉に押され県立高校教師に。保育園の送迎を手伝ってくれたご近所さんに感謝。

C 教師が挑戦する姿を生徒に見せたいという思いでJICAの教師海外研修に参加。発展する外国の姿から日本の未来に危機感を抱き、SDGsと関連づけたプレゼンの授業を実施。授業実践報告書を通じてネットワークが広がる。



D たまたま視聴したNHK『クローズアップ現代』で、非大卒の若者に教育とインターンの機会を提供する団体を知る。自分がしたいのはコレと思い、「国語の授業をさせてほしい」とコンタクト。現在、その社団法人の理事を兼任。

E 同僚が行っていた異学年のグループ学習に感激し、翌年、総合探究の責任者として全校に展開。また求人票の整理に追われる現場に愕然としSNSで発信。進路指導主事として、求人情報をDX化するサービスを民間企業と開発。

F 教師13年目に埼玉県教育局に異動。産業教育・キャリア教育担当指導主事となった翌年「生徒と教師が主語のキャリア探究へ」を掲げ、「お仕事図鑑pitchトーク」「オンラインキャリア探究セミナー」などの施策を全県で実施。

(※)に陥りかねませんよね。

古屋 まさにそう。なので私は信頼する大先輩に時おり「僕が今、やるべきことってなんでしょう?」「この瞬間、僕が会うべき人はいますか?」とアドバイスを求めるようにしています。

上田 私も、普段は赴かない居心地の悪いような場所にもあえて足を向けるように心掛けていますし、生徒にもコンフォートゾーンを抜け出すよう促しています。探究のテーマを見つけれない生徒にはよく「本屋さんに通ってみれば」とも言います。書店に行くと、ネットでAIが薦めてくる情報とは違う、何かしら偶発的な気づきや出会いがあるじゃないですか。

——ただ、外向き志向の子は別として、普通の生徒がアンコンフォートゾーンに踏み出すって難しくないですか?

上田 だからこそ自分だけでは出会えないものと出会えるインフラに、そして新しい出会いをデザインする場に学校がなれたら素敵だなと思います。

古屋 おっしゃる通りで日本の先生の最大の専門性の一つにファシリテーション力があると考えています。知識の伝達自体は、AI時代、学校でなくても代替できる余地はありますが、生徒の個性やバックグラウンドを熟知したうえで、それぞれにあった学びや体験をデザイン

ンできる専門家はそうはいません。

上田 私も教師は媒介者であるべきだと考えています。世の中には教科書以外にも素晴らしい教材がたくさんあります。それらを、的確なタイミングで投げかけ、時に学校外の人をつなげながら生徒の可能性を広げていく。ただ、教師は仕事量が多いのも事実で、誰かしらの何かしらの我慢の上に成り立っている現状があるんです。

古屋 先生ならではの責任感や真面目さを時にはリセットし、無理なものは無理と言える力や、援助希求できる力が教師のスキルセット

意見が
違う人たちが集う箱。
そんな学校の価値を
再認識した



Sachiko Ueda

※エコーチェンバー（反響室）とは、SNSなど同じ趣味や思想をもつ人が集まるコミュニティで自分と似た意見を見聞きし続けることで、世の中一般においても同じだと信じ込む現象。



に加わるといいですよ。キャリア自律という言葉がありますが、プロになればなるほど個人でがんばる必要などなく、他人に頼っていいんです。キャリア教育の一次的な目標として頼れる存在を見つけることも大切だと思います。

——外部だけではなく、学校内のリソースを「機会」として有効活用することに関してはどうでしょうか？

古屋 自分がいる場所とは社会的文化的に違う環境に身を置くことで学ぶ越境学習(27ページ)という概念がありますが、「違い」は

組織の外側だけにあるのではなく、日常空間にも存在します。青山学院大学の香川秀太教授はそれを「日常の越境場」と呼んでおり、学校内部に潜む自分の外側の世界を顕在化できれば、キャリアを考える豊かな機会になると感じます。

上田 私は国語や探究の授業で「pitchトーク」というグループ学習を行っていました。ピッチとは短時間で相手の心を動かすスピーチのこと。まずグループ内で90秒ずつ、あるテーマでスピーチしてもらいます。その後グループの代表を決め、全体で発表する。例えば「どんな社会課題に義憤を感じるか」というテーマであれば40人分の社会課題に触れることができ、「あいつ、こんなこと思っていたんだ」とか「自分は人と違うことを感じるらしい」と気づき、自己認識が深まります。学校とは、意見が違う人たちが集う箱のようなもの。他者と交わることで生じる学びの価値を再認識できました。

古屋 素晴らしい取組ですね。「違いからしか学べない」と言った先人がいますが、私は学びのキーワードとして「共感と違和感」を挙げています。共感がないと「自分には関係ないこと」と流しがちですが、違和感がなければ、「わかるー」で終わってしまう。そう考えたとき、学校はその両方を装着した場所ではないかと思います。高校のクラスって似た属性の人間が集まるため、共感が生まれやすい。一方で上田さんが授業で可視化

「共感」と「違和感」。
二つが揃って
学びは広がる



Syouto Furuya

しているように、実は生徒一人ひとり違う考えを有しているため、違和感が生じることもある。学びが生まれる可能性が高い空間だと改めて感じました。

上田 学校は授業が命。主体的・対話的で深い学びが実現できれば、特別なイベントをせずとも意義のあるキャリア教育は実現できると思っています。「他者」と出会う機会であれば、クラスメイトとの対話もそうですが、教科書や教材自体にも出会いはあると感じています。以前、国語の授業で辞書を使用していたのですが、3年間、真っさらな辞書のままという生徒が大勢いました。どうにかしたいと考えた結果、「この子たちにとって調べるツールとしての辞書は不要でも、言葉と出会うツールにはなるのでは」と思い立ち、辞書の中から気になる言葉を選んでもらうワードハントという取組をしていました。

古屋 ページをめくると、これまで知らなかった言葉との出会いがあるわけですから、まさに偶発性ですよ。

上田 そうなんです。そして素敵だと思えた言葉を皆でシェアしたことで、オリジナルの「素敵な言葉の辞書」が完成しました。結果、語彙力や表現力を高められましたし、言葉を調べるためのツールという、辞書本来の使われ方をされるようになったんです。さらに、自分が素敵と感じた言葉の共通項から、自身の興味関心に気づき、進路選択へとつな

げていった生徒もいたり、逆に生徒が素敵と感じた言葉の共通項から、教師である私とその生徒の特性に気づき、キャリア支援の際の参考になったり、といったことも。教科教育の中でのキャリア教育的側面を感じた経験でもあります。

——ありがとうございます。最後に教師のあり方についてお聞かせください。

古屋 失敗や悩みも含め、生の言葉を伝える機会をつくってほしいです。高校生のロールモデルになり得るのは、自ら新しいことに挑戦し続けている先生ではないでしょうか。試行錯誤しながら自身のキャリアを豊かにしていこうと行動している姿が、卒業後、多くの機会と選択を重ねていく必要がある高校生に勇気を与えるでしょう。

上田 私も自分に向き合った結果として出てくる言葉を教師自身がアウトプットすることが大切だと思います。外に発信すれば、それを受け止めてくれる人も大勢生まれます。教師同士、学校同士がつながり、実践を共有し合うことができれば、そして「自分でなんとかしなきゃ」という“我慢”を手放し、社会に対して「助けて」と言えるようになれば、学校の力は何倍にもなるのではないのでしょうか。教師って子どもたちの未来を創る仕事に人生を懸ける選択をした人たちです。これほどパワフルでイノベーティブな集団はいないと思っています。